

関西学院大学卒業生調査報告書 (2007年3月)

調査方法

1. 調査票

調査票については、本報告書の巻末に付されている。この調査票は、第1回調査の調査票を基に作成したものである。調査の継続性を鑑みて、質問内容や選択肢は極力変更しない方針で内容を検討した。しかし、時宜的に古くなった選択肢や第1回調査の結果から変更や追加を加えた項目もいくつかある。第一部の本学に関する部分では、「本学でキリスト教に触れた影響 (Q8)」と「キャンパスシンボルについて (Q14)」「ホームページに載せて欲しい情報 (Q23)」をの3つを新設した。また、「自分の子ども、身内に関学への進学を勧めるか (Q4)」の「勧めない理由 (Q4-3)」の選択肢に第1回調査の「その他」の記述に多く見られた理由「本人が決める事だから」「学費が高い」の2つを選択肢として追加した。「在学中にしておけばよかった事 (Q3)」の選択肢に「海外留学を追加した。」「これからの関学教育に望む事 (Q5)」については「直接資格修得に結びつくカリキュラム」「国際性を身につける事の出来る授業の充実」の2つを選択肢に追加した。「これからの関学に望むこと (Q17)」の選択肢に「偏差値の向上」を追加した。第2部の現在の生活について問う部分では、職業に関する分類については、就職課の用いている分類に従って入れ替えた。また、関心については第1回調査以降にできた「大阪梅田キャンパス」と「東京オフィス」の認知度やそこのプログラムに関する設問をQ26～29として追加した。

2. 標本抽出と調査の実施

前回調査では、調査年である1999年(平成11年)の卒業生を起点に5年ごとにさかのぼり1999(平成11年)～1954年(昭和29年)までの10階層の卒業生を対象に4分の1を抽出した。今回もこれにならい、調査年である2005年(平成17年)を起点に5年毎の卒業年をサンプリングの対象とし、新制大学第1期の1950年(昭和25年)までの12階層の卒業年ピックアップされた。該当年の卒業生の総数、32,616名を対象に、卒年毎に4分の1を抽出した後に、海外在住者・住所不明者・物故者を除いたものを最終的なサンプルとした。このため最終的なサンプル数は年代が高いほど抽出率が低い結果となり、サンプルの総数は7,431で抽出率は22.8%となった。

これらの対象者に調査票(付録)と返信用封筒を添えて2005年7月1日に同年7月31日(日)を提出期限として送付した。調査は、無記名・自記入式、提出方法は返信用封筒で郵送とした。回収率を上げるために、7月25日に調査協力依頼の葉書を対象全員に送付し、提出期限を8月12日(金)とする旨を同時に明記した。

最終的に8月30日(火)までに研究室に到着した有効回答票2,758について入力集計を行った。

なお、対象者の抽出、名簿作成にあたっては校友課のデータに基づいてさくらKCSへ委託した。調査票の発送・回収整理作業にあたっては本研究室の事務職員並びにアルバイト

ト職員の協力を得て実施された。調査票の入力集計および本文中のグラフ出力に関してはみずほ情報総合研究所に委託した。

3. 回収率と回収者の属性

以上の手続きを経て行われた今回の調査の回収率は 37.4%であった。これは6年前の第1回調査の 40.2%に比べると 3.8%の減少となっている。これは、卒業年の古い方の回収率は高いが、1985年卒を境にサンプル数の多い若い世代の回収率が低い事に影響されていると考えられる。第1回調査(1999年)では階層年の1番古い1954年卒より2番目に古い1959年卒の階層が少し高くなり、以降1番新しい階層年の1999年まで下がる。これに対して、今回特徴的な事は、1番階層年の古い1950年卒より1955年で15%と大きく落ち込み、3番目の階層(1960年卒)で14%ほど上昇しそれ以降漸次減少している。1999年調査の回収率を、1999年卒と2000年卒から重ねてグラフにすると図Aのようにほぼ重なり、これらの回収率の変動は卒業年による効果が強いようである。

回収率を学部別に見ると、神学部が44.4%と2番目に高い文学部の39.9%に比べて4.5ポイント高く、一番回収率の低い総合政策学部の29.8%と比べて14.6ポイントの差がある。しかし、対象となった母集団(対象卒年の卒業生総数)比率を票B-2で見ると神学部、総合政策学部ともに、母集団比率が0.4%、2.3%であるのに対し、回収者比率が0.6%、2.0%と卒年毎に見た母集団比率との開きは小さく、回収者の学部構成比は母集団での構成比率とあまり差が見られない。

性別、出身校、学生時代の団体参加については、母集団のデータが存在しない。回収された属性を性別で見ると、男性7対女性3という割合であり、これは第1回調査とほぼ同じである。全ての階層年で卒業生が存在し、母集団比率の高い法、経、商の3つの学部ではの女性比とこれまでの学生調査での傾向を考えると女性の回答率の方が高い事が推測される。

出身別では、中高の出身者が全体の8.9%、と前回の9.3%よりやや低い为数の多い若い卒年層に占める比率は古い卒年層に比べると低い事を考えるとおそらく前回の傾向と変化していないと思われる。

団体に所属していたかについては、回答者の73%が所属、27%が非所属と回答している。1976年から2006年まで継続されている14回の在学生調査の団体所属率の平均は69.8%であり、ほぼこの回答と一致する結果となっていると言えよう。

最後に回答者の住居地域であるが、北は北海道から南は九州・沖縄まで日本全国からの回答が寄せられている。注目する事は、サンプリング後に海外在住者を除いたのにもかかわらず、海外から回答を寄せられた方が21名おられた。本学同窓生の空間的な広がりを感じる。しかし、回答率で見ると回答者の70%は近畿県内に住んでおり、次いで関東の15%と、全体比率では関西、首都圏在住者がほとんどを占めている。

結果の概要

調査票の構成

調査票は、卒業年・卒業学部など回答者の属性を知るための8つの項目と母校に対する意識や現在の職業をたずねた30の質問項目からなっている。その質問のほとんどは選択肢の中から選んでもらう形式であるが、最終項目には自由記述欄も設けられており、「関学への期待・意見・要望」について文章で記述してもらった。これについては、寄せられた全文を巻末に掲載している。

設問は、内容から「関西学院大学」に関するものと、卒業生の「現在の生活」に関するものに大きく2分出来る。前者は大学に関する全般的な事項、教育、帰属意識に関するもので、後者は職業と関心に関するものである。ここでは、この項目分類に従ってその回答結果の概要を紹介したい。

調査結果

I. 関西学院大学について

A. 全般

まず、「身内へ関学進学を勧めるか(Q4)」という問に対しては、全体で8割以上が「勧める」と回答している。年代別では70代の卒年者では実に9割以上が肯定的な回答を寄せている。「勧める理由」については、「キャンパスの雰囲気がよい」が約7割で、「母校だから」「スクールモットーに共感できる」がそれぞれ35%、30%と続いており、「教育スタッフが充実している」という回答は5%にすぎず、勧める理由は感覚的なものが先行しているようである。逆に「勧めない理由」については、「本人が決めることだから」が7割を超えており、続いて「学費(19%)」「スタッフが充実していない(13%)」となっている。「勧めない理由」は、かなり機能的な側面が重視されているようである。これらの傾向は前回の調査とほとんど変わらない。

次に関学を「イメージ(Q6)」で捉える設問では、「明るい」「きれい」「親しみやすい」「開放的」「居心地が良い」の項目が高く、「気力が充実している」「進歩的」というイメージは低い。これも前回同様の結果であり、全ての項目での変化は0.1以内であった。

本学の教育理念を現すスクールモットー“Mastery for service”の浸透度を問うQ7では、「常に行動の規範としている」「頻繁に意識している」という回答があわせて全体で22.8%あり、前回の21.6%よりややポイントを上げている。卒年別では前回同様、卒年が古い世代ほどこの強い肯

定率が高くなるという傾向を示した。

本学での学生生活で「キリスト教」に触れたことによる、考え方や生き方への影響をたずねたQ8は今回から新設された設問である。全体では、「強く思う」「そう思う」の合計は、38.3%と4割近くが本学でキリスト教に触れたことでの影響を認めている。これもスクールモットーと同様に卒年が古いほど多くなる傾向があるが、1995年卒まで肯定率が減り続けるが、2000年、2005年卒で1980年卒と同等の数値まで上がっている。

「これからの関学に望むこと(Q17)」では、第1に「学問研究分野での知名度の向上(65%)」第2に「教育カリキュラムの充実(47%)」、3番目に「生涯学習プログラムの開発(40%)」となっており、前回と比べると「生涯学習」への要望が10ポイント以上下げ前回の2位から3位へと順位を入れ替えている。また、全体で特徴的な変化は、前回0.4%しかなかった「今までのやり方を堅持する」という回答が今回は6.7%と際だって増えた事である。

B. 教育

「大学時代の充実度(Q1)」をたずねる設問では、全体平均(3.8)、「充実していた」という回答(「非常に充実」と「かなり充実」の選択率を足しあわせたもの)は70%で前回とほぼ同じ結果となった。卒年毎にみると「非常に」とう回答率は1950年卒で5%と他の卒年に比べて非常に低く、1980年卒までは「非常に」の率は12~15%であるのに対し、1985年卒以降増え続け直近の2005年卒では27%と80年以前の倍近い数字になっている。「かなり」という回答は、47%(2000年卒)~59%(1955年卒)とばらついているが、卒年との関係性は認められない。

大学で学んだことや経験したことの有用度についてたずねる質問(Q2)では、5段階評価で「クラブ・サークル活動」が3.3ポイントと評価が1番高く、次いで「アルバイト(3.3)」、「専門科目(3.3)」と続いている。一番評価の低かったのは「キリスト教関連科目・チャペル」で2.7ポイントであった。これらの結果は、平均値も傾向も前回とほぼ同じものであった。

「在学中にしておけば良かったこと、身につけておきたかった能力(Q3)」については、前回には無かった選択肢「海外留学」が27.1%となったために全体的に前回と比べてそれぞれの選択肢のポイントが下がっている。しかし、1番選択率の

多かったのは「語学力 (67%)」, 次いで「専門知識 (41%)」「資格 (41%)」と全体傾向はほとんど変化していない。

「これからの関学教育に望むこと (Q5)」については、「直接資格修得に結びつくカリキュラム」「国際性を身につけることが出来る授業の充実」の2つの選択肢が増えた。そのため前回の結果かとは大きく異なるものとなった。前回一番要望の高かった「語学力をつける授業」が42%から10ポイント以上下げて30%となり、新しい選択肢「国際性」を望むものが33%と2番目となった。前回3番目にたかった「専門実務能力が身に付くカリキュラム」も10以上ポイントを下げて「資格に結びつく」の方がやや高い率となった。つまり、「語学力」よりも「国際性」が、「専門実務能力」よりも「資格」が求められる結果となった。

C. 帰属意識

「キャンパスへの訪問頻度 (Q11)」をたずねる設問では、「まったく訪問したことがない」という回答が前回の12%よりややへって10%となった。「訪問理由」では、卒年が古いほど「大学祭・同窓会」でキャンパスを訪れる率が高くなり、若い世代ほど「施設利用」や「証明書をもらいに」などの実用面でのキャンパス訪問が多くなる。これらは前回の結果とほぼ同様であった。

「同窓との繋がり (Q12)」については、半数以上が「プライベートなつきあい (55%)」を上げており、ついで、「クラブ・サークル・ゼミの集まり (32%)」となっており、これらも前回調査とあまり差がない。しかし「特別なものはない」という回答が前回の18%から23%とやや増えているのが気にかかる。

「寄付や献金の経験 (Q13)」についても前回同様、「したことがある (38%)」が約4割であった。

今回から新設された「関学のシンボルとして思い浮かぶもの (自由記述: Q14)」については、回答者のうち2071 (75%) に「時計台」が上げられており4人に3人は母校のシンボルとしてあげている。次いで「中央芝生」が1191(43%)とこの2つを上げるものが非常に多く、3番目にあがってくる「キャンパス」の246 (9%) 以降は数パーセント代にとどまっている。

「校歌を歌えるか (Q15)」という問については、「まったく歌えない」が前回の9%から10%とやや増え、「完全に歌える」層が53%から46%

へとポイントを落としている。20代の卒年層では、「全く歌えない」が22%と16%と他の卒年層より高く、若年層での「校歌離れ」が進んでいるように見える。

母校の情報の入手の方法 (Q16) については、全体では、同窓会誌「母校通信」が79%と8割を占めている。これは前回と同様の結果であるが、ホームページ (HP) については、前回の3%弱から6.8%と倍以上になっている。特に直近の2005年卒では、2000年卒で11%にすぎないHPが45%と半分近くを占めており、「母校通信」「空の翼」その他の紙媒体を含めた数字よりも大きくなっている。

若い卒年層に限らず、関学HPに対する認知度も前回調査に比べてすべての卒年で高くなっている。「HPをみたことがある」という回答は、前回の21%から49%と倍増しており、それに伴いHPに乗せてほしい情報についても年代により多様化している。

II. 現在の生活

A. 職業

Q18では現在の職業についてたずねた。この質問の選択肢は前回と全く異なり、直接比較することはできない。全体で一番多かったのは、「管理職」の19%で、ついで「事務職」13%、販売業11%となっている。逆に1%以下となった職種は、「労務職」「技能職」「保安職」「農林漁業」で、本学の卒業生は、ほぼホワイトカラー系の職種につき、卒年後15年目あたりから管理職へ就くという職業人生を送っているようである。

転職の経験 (Q19) については、全体では、半数以上の52%が「転職の経験はない」と回答しており、40%が転職経験者、7%が「就職の経験はない」と回答している。転職の理由については、「自分の可能性を追求してみたかった (20%)」「他にやりたい仕事が見つかった (14%)」「家業を継ぐため (10%)」の順になった。

今後職業人に必要になってくる技能・資格 (Q22) については、前回1番選択率の高かった「ITに関する技能・資格」が61%から45%へとポイントを大きく落とし、2位になり、「外国語に関する能力・資格」が48%から55%になり、一番高い選択率となった。

B. 関心

再入学するとしたら、どの学部・研究科を選ぶか（Q21）を問うた質問では、前回は約3割が大学院を選択していたのに対し、今回は49%、約半数が大学院を選び、特に前回調査以降に開設された「言語コミュニケーション」「ロースクール」「ビジネススクール」の3つの高度専門職業人コースの選択率は合わせて34%と関心の高まりが見て取れる。反面、従来型の研究科への関心が低くなっている事も伺われる。

大阪梅田、東京のエクステンションの認知度（Q26）についてたずねた。開設5年目の大阪キャンパスの認知度は40%、開設2年目の東京オフィスは20%となった。同窓の7割が近畿圏に住んでいることや開設されてからの時間を考えると、大阪梅田キャンパスの認知度はやや低いといえるかもしれない。東京オフィスの6つの活動についての認知度はいずれも5%以下の低い数字となっている。これらのエクステンションで希望するプログラム（Q28）については、いずれも、「各種資格取得関連講座」を望む声が一番多かった。梅田キャンパスでは、「一般教養プログラム（28%）」と「ビジネスパーソン向けプログラム（28%）」が同等に要望があったが、東京では15%と21%の「ビジネスパーソン向けプログラム」の要望が強かった。（谷田 薫）